上峰町文化財調査報告書第49集

三上遺跡９区

令和元年度建売分譲住宅建設工事に伴う
埋 蔵 文 化 財 確 認 調 査 報 告 書

2020年3月

上峰町教育委員会

上峰町文化財調査報告書第49集

三上遺跡９区

令和元年度建売分譲住宅建設工事に伴う
埋 蔵 文 化 財 確 認 調 査 報 告 書

2020年3月

上峰町教育委員会

序

従来、上峰町は「遺跡の宝庫」と言われてきました。北部の脊振山系、その南麓から派生し南北に延びる洪積世丘陵と谷、さらに有明海へと続く沖積平野と変化に富んだ地形を含む町域には、いたるところに先人たちの暮らしの足跡が刻み込まれています。教育委員会では、こうした人々の暮らしの足跡、歴史的資産を保存活用し、将来へ継承していくために、開発と文化財の保護との調整に努めてまいりました。

近世以来の純農村集落の面影を色濃く残してきた上峰町は、昭和40年代後半から「農工併進のまちづくり」を理念に掲げ、工業団地の整備による大規模工場の誘致、農業基盤整備事業の実施とまちづくりを進めてまいりました。町の中央を国道34号線が東西に横断し、ここから、福岡県久留米市へは県道が通るという恵まれた交通環境に位置しており、佐賀市や鳥栖市、久留米市へも最適な通勤圏にあるところから、近年人口も着実に伸び、ベッドタウンとして発展してまいりました。これに伴い、各種商業施設、事業所等の町内進出も相次ぎ、上峰町は平成元年の町制施行以来、この30余年間で近代的な田園都市へと大きく変貌を遂げました。

本書は、建売分譲住宅建設工事に先立ち、上峰町教育委員会が実施した三上遺跡の埋蔵文化財発掘調査事業の報告書であります。今回の発掘調査では、奈良・平安時代の土壙などが検出され、当時の人々の暮らしを考えるうえで貴重な資料を得ることができました。この報告書を学術資料として、また住民の共有の財産としての文化財を大切に保存していくための資料として役立てていただければ幸いです。

なお、この町内遺跡確認調査にあたって、ご指導、ご協力をいただきました開発事業主体者をはじめ、関係各位に対し深く感謝申し上げます。

令和2年3月

上峰町教育委員会
教育長　野　口　敏　雄

例　言

1. 本書は、建売分譲住宅建設工事に先立ち、開発事業主株式会社 C&C 代表取締役　行武　忠孝氏の委託を受け、上峰町教育委員会が発掘調査を実施した佐賀県三養基郡上峰町大字坊所字三上 3183-1、3184-1 に所在する三上遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、開発予定地 1,906 ㎡のうち宅地内道路部分 300 ㎡について、上峰町教育委員会が実施した。
3. 調査区の名称は三上遺跡内で 9 カ所目の調査であるため、三上遺跡 9 区とした。
4. 現地での発掘調査は令和元年 8 月 2 日から 9 月 13 日まで行った。調査後の出土遺物・記録類の整理作業は令和元年度に上峰町教育委員会が行った。
5. 現場での図面、写真による記録作業は、調査員及び整理作業員が行った。
6. 遺構などの現場における写真撮影は、調査員が行った。
7. 本書中の挿図・写真図版などの作成作業は、調査員の指示により、整理作業員が行った。
8. 本書の執筆・編集は、原田大介・松本周作・伊達有彩が行った。
9. 今回の調査で出土した全ての遺物及び現場で作成した図面・写真・その他の記録類は、上峰町教育委員会で保管している。

凡　例

1. 三上遺跡の略号は「MKM」である。
2. 遺構番号に記した 2 文字のアルファベットは、遺構の種別を表す。
   SK……土壙
3. 本文・挿図中の方位については、全て座標北を基準としている。
4. 表中の数値に付した記号で、（　）は推定値を、※は部分値を表す。
5. 先の市町村合併により、上峰町周辺の町村も合併が進み町村名が変更になっている。本書では現在の市町名のあとに（　）で旧市町村名を記している。

調 査 組 織

平成 31 年度

調 査 主 体	上峰町教育委員会			
調査事務局	総　　括	野 口 敏 雄	上峰町教育委員会	教育長
	事務主任	中 島　　洋	〃	文化課長
	経費執行	原 田 大 介	〃	文化課主査
	〃	伊 達 有 彩	〃	文化課文化係
	〃	松 本 周 作	〃	〃
調 査 組 織	調 査 員	原 田 大 介	〃	文化課主査
		伊 達 有 彩	〃	文化課文化係
		松 本 周 作	〃	〃
調 査 指 導		佐賀県		

発掘作業参加者

山田　富士夫・牟田　康孝・白土　喬・古賀　磐夫・杉谷　嘉泰・宮崎　正秋・田中　一馬・豊福　政子・石橋　泰隆・生島　みどり・江﨑　愛子・島　美保子

整理作業参加者

江﨑　愛子・島　美保子（平成 31 年度・令和元年度　整理作業員）

目　次

序
例言・凡例
調査組織・発掘作業参加者・整理作業参加者

Ⅰ．遺跡の位置と環境 ……1
1．三上遺跡の位置 ……1
2．歴史的環境 ……1

Ⅱ．調査の概要 ……6
1．調査に至る経緯 ……6
2．調査の経過と方法 ……6

Ⅲ．遺跡の概要 ……7
Ⅳ．遺構 ……7
Ⅴ．遺物 ……8
Ⅵ．まとめ ……13

挿図目次

Fig. 1　三上遺跡９区の位置及び周辺遺跡（1/50,000） ……3
2　三上遺跡９区　周辺地形図及び調査区位置図（1/5,000） ……9
3　三上遺跡９区　調査区配置図及び遺構配置図（1/200） ……10
4　三上遺跡９区　遺構実測図 ……11
5　三上遺跡９区　遺物実測図 ……12

表目次

Tab. 1　三上遺跡９区　出土土壙一覧表 ……11
報告書抄録

図版目次

PL. 1-1　三上遺跡９区　調査前
1-2　三上遺跡９区　調査区遠景
2-1　三上遺跡９区　遺構検出状況
2-2　三上遺跡９区　調査終了後
3-1　SK-901
3-2　SK-902
3-3　SK-903
3-4　SK-904
3-5　SK-905
3-6　作業状況
4-1　SK-902 出土遺物（1）
4-2　SK-902 出土遺物（2.3）
4-3　SK-902 出土遺物（4）
4-4　SK-902 出土遺物（5.6）
4-5　SK-902 出土遺物（7.8）
4-6　SK-902 出土遺物（9.10.11）
4-7　SK-902 出土遺物（12）
4-8　SK-902 出土遺物（13.14）

Ⅰ．遺跡の位置と環境

1．三上遺跡の位置（Fig. 1）

三上遺跡は、吉野ヶ里町目達原付近から本町上米多集落付近へ延びる目達原丘陵の中央部、標高約 8m～16m付近に位置している。

三上遺跡が所在する佐賀県三養基郡上峰町は、佐賀県東部の穀倉地帯である佐賀平野のほぼ中央、三養基郡の西端に位置しており、東部は同郡みやき町（旧中原町・旧北茂安町）と、南部は同郡みやき町（旧三根町）と、西部は神埼郡吉野ヶ里町（旧東脊振村・旧三田川町）と境を接している。また、この神埼郡との境界は、古代以来の三根郡との郡界を踏襲しており、現在も町のほぼ中央を東西に横断する国道34号線付近の旧三田川町と境を接する地域は郡境地区と呼称されている。

鳥栖市から佐賀市大和町（旧佐賀郡大和町）に至る佐賀県東部には、北部に背振山地、その南麓に発達する更新世丘陵、さらに南部には有明海へと続く沖積平野が展開するという、変化に富んだ地形が発達している。なかでも、山麓部から沖積平野部へ移行する部分に発達する更新世丘陵は、山麓部に源を発し有明海へと南流する大小の河川によって浸食され北から南へ延びる舌状を呈した段丘を数多く形成している。そして、これらの段丘は古くから人々の生活の場として利用され、段丘上には数多くの遺跡が分布し、遺跡数、内容ともに県内でも有数の地域となっている。

そのようななか、南北に細長い町域をもつ上峰町においても、北部に山麓部、中央部に更新世丘陵部、南部に沖積平野部と、この佐賀県東部の特徴的な地形が展開しており、とくに中央部に発達する更新世丘陵地域を中心に遺跡の分布が知られ、古くから「遺跡の宝庫」と呼ばれてきた。

2．歴史的環境（Fig. 1）

上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観すると、前述のとおり、山麓部から更新世丘陵部におよぶ一帯が古くから人々の生活の舞台となっており、山麓部及び各段丘上には、現在、遺跡の存在が知られ、県内においてもとくに弥生時代遺跡を中心に遺跡の分布密度が高い地域となっている。沖積地を望む丘陵部のほとんどが、各時代の集落あるいは墓域として占有され、とりわけ、弥生時代以降の遺跡を縄文時代以前の遺跡と比較すると、量的にも、質的にも爆発的に増加、充実する。銅鐸の鋳型を出土した鳥栖市安永田遺跡[1]、約400基の甕棺墓が検出されたみやき町（旧中原町）姫方遺跡[2]、埋納された12本の銅矛を出土したみやき町（旧北茂安町）検見谷遺跡[3]、甕棺墓から舶載鏡を出土した吉野ヶ里町（旧東脊振村）三津永田遺跡[4]、近年の工業団地建設に先立つ調査で貴重な遺構、遺物が検出された神埼市（旧神埼町）・吉野ヶ里町（旧三田川町・旧東脊振村）に跨る吉野ケ里遺跡[5]など多くの著名な集落遺跡、墳墓群が知られ弥生時代の「クニ」あるいは「ムラ」単位の集団の存在が想定されるに至っている。このようななか、南北約12km、東西約3kmと南北に細長い町域を持つ本町においても同様に、町の北部から中央部を占める更新世段丘上に弥生時代を中心に各時代の遺跡が分布している。

先土器時代の遺跡についてみると、各段丘で層序が異なる本地域においては本格的な調査がなされていないのが現状で、断片的な遺物の出土、採取にとどまっている。町内では、平成4年度の県営農業基盤整備事業に伴う八藤遺跡の調査において細石刃1点とこの時期のものと考えられる石器類が少量出土しているが、これが発掘調査における主な出土例である[6]。周辺地域では、吉野ヶ里町（旧三田川町）との境界に位置する二塚山丘陵の吉野ヶ里町（旧三田川町）側からナイフ形石器の採取例が報告されている[7]。また、平成5年度の県営農業基盤整備事業

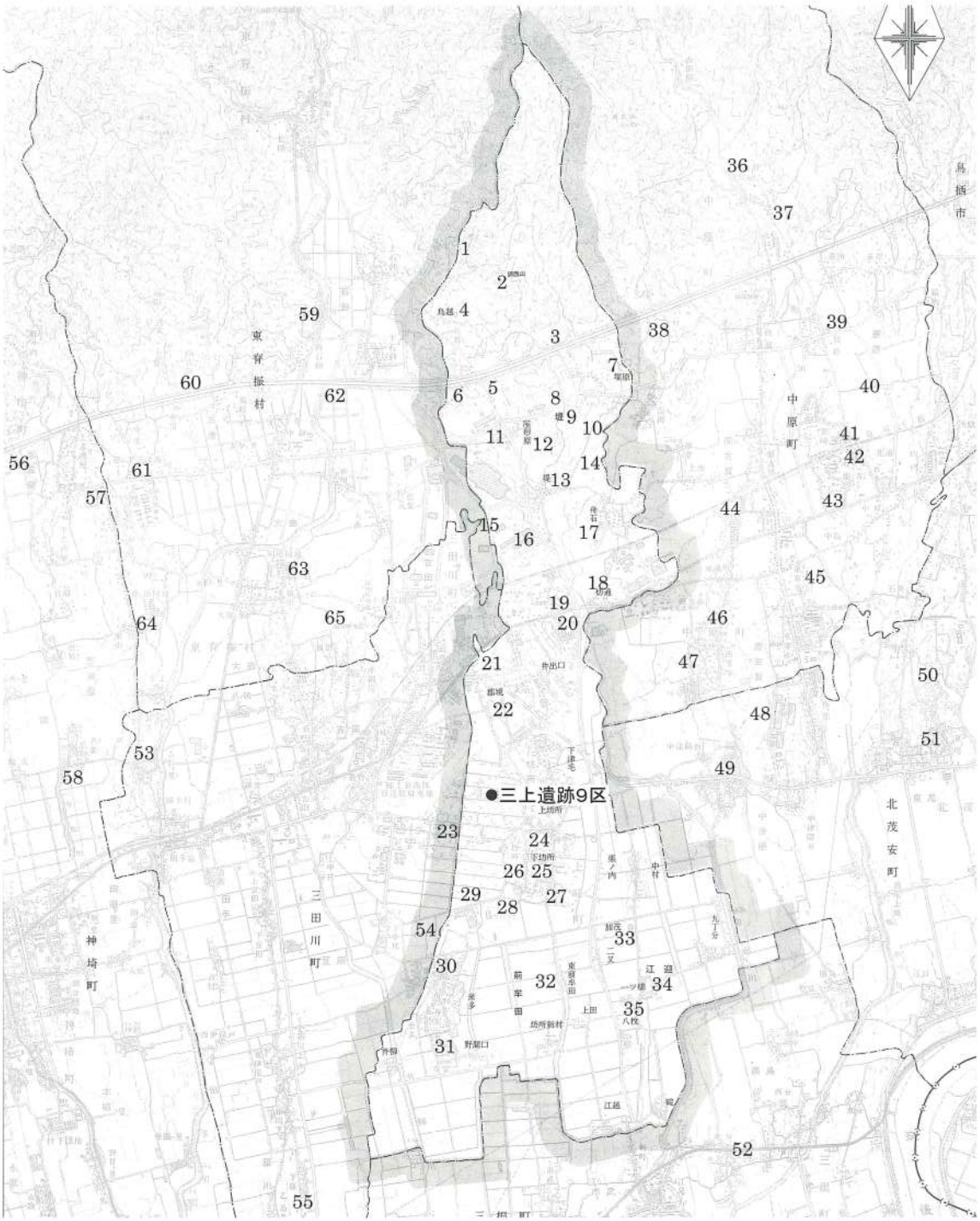
に伴う八藤遺跡下層における阿蘇4火砕流跡と埋没林に係る調査において、先土器時代の年代示標となっている姶良-Tn火山灰（AT）の含有ピークが、通常の丘陵上の埋蔵文化財調査において遺構検出面としている「地山」の表層を構成する黄褐色風積土層の最上部付近、アカホヤ含有層のやや下部にて検出されている[8]。

縄文時代になると、みやき町（旧中原町）香田遺跡[9]や吉野ヶ里町（旧東脊振村）戦場ヶ谷遺跡[10]などが出現する。町内においても、これまでも町北部の丘陵部から土器や石器が、耕作や先覚者の遺跡の表面観察などによって断片的に出土、採取されていたが、近年の上峰北部農業基盤整備事業に伴う発掘調査の結果、平成元年度の船石遺跡11区[11]、平成2年度から5年度にわたり実施した八藤丘陵の調査[12]において、遺構や遺物がまとまって検出されており、今後の調査例の増加が期待されている。

弥生時代になると、遺跡の数や規模、その内容が飛躍的に増加、充実することは先に触れたが、早くから『魏志倭人伝』の「弥奴国」の所在地を佐賀平野東部、なかでも三養基郡西部の旧三根郡にあてる論考が行われてきたことは周知のことである。旧三根郡に所属する上峰町においても、丘陵部のほとんどにこの時期の遺跡が展開している。しかし、町の南部や中央部の米多地区、坊所地区の丘陵部は、中世以降集落として発達し、早くから宅地化が進み、本格的な発掘調査の例に乏しく、わずかに再開発に伴い部分的に小規模の発掘調査が行われているに過ぎず、遺跡の詳細について把握できていないのが現状である。これに対して、町北部の大字堤地区では、近年の工業団地建設や農業基盤整備事業など大型開発に伴い広範囲かつ大規模な発掘調査が実施され、各遺跡から当時の社会の様子を知るうえで貴重な資料が得られている。町内の代表的な遺跡としては、甕棺墓から細形銅剣や貝釧を出土した切通遺跡[13]、吉野ヶ里町（旧東脊振村・旧三田川町）に跨る、佐賀県東部中核工業団地の建設に伴い甕棺墓、土壙墓など約300基が調査され、舶載鏡、小型倣製鏡をはじめとする貴重な副葬品を出土した二塚山遺跡[14]、佐賀県住宅供給公社の宅地造成に伴う調査で一集団の集落部分の全容が明らかになった一本谷遺跡[15]、地区運動公園整備に伴う調査で5世紀代の古墳とともに支石墓はじめ多数の甕棺墓が検出された船石遺跡[16]などが知られている。また、近年の上峰北部県営農業基盤整備事業に伴う調査においても、船石遺跡[17]、船石南遺跡[18]、八藤遺跡[19]から住居址や甕棺墓などが多数検出されている。

古墳時代になると、この地域にも首長墓が出現する。初頭の時期にはみやき町（旧中原町）姫方原遺跡[20]、上峰町五本谷遺跡[21]などにおいて方形周溝墓が営まれ、やがて中期にかけて鳥栖市から佐賀市大和町に至る山麓や丘陵部に大型の前方後円墳が出現する。鳥栖市剣塚古墳[22]、みやき町（旧中原町）姫方古墳[23]、上峰町西南部から吉野ヶ里町（旧三田川町）に跨る目達原古墳群[24]、神埼市（旧神埼町）伊勢塚古墳[25]、佐賀市銚子塚古墳[26]、佐賀市大和町船塚古墳[27]など佐賀県東部の代表的な古墳が築かれるようになる。さらに後期になると、現在長崎自動車道や県道佐賀川久保 - 鳥栖線が通る山麓部から丘陵部に跨る一帯に小円墳を中心とした古墳が多数築かれ、それぞれが山麓部の尾根や谷あるいは丘陵を単位として後期古墳群を形成している。

後の『肥前風土記』にみえる三根郡米多郷に属する当時の上峰町一帯は、『古事記』、『国造本紀』などの記事によれば応神天皇の曾孫にあたる「都紀女加」なる人物が初代の米多国造として中央より下向した地域に比定され、その中心は、町南西部の米多地区から吉野ヶ里町（旧三田川町）東部の目達原一帯にあったと推定されている。町内の主要な古墳としては、都紀女加を始祖とする米多国造一族の墳墓として、5世紀代後半に形成されたと考えられる上のびゅう塚（現在、陵墓「都紀女加王墓」宮内庁管轄）はじめ無名塚、大塚、古稲荷塚、稲荷塚などの前方後円墳ほかからなる目達原古墳群[28]が知られていたが、戦前の陸軍飛行場建設の際に、唯一上のびゅう塚を残し他の古墳は簡単な発掘調査の後破壊されている。また町の北部の古墳としては、同じく5世紀代の古墳で、蛇行状鉄剣、蛇行状鉄矛を出土した船石天神宮境内の船石古墳1～3号墳[29]が知られている。古墳時代後期の古墳



上峰町
1 奥の院古墳群
2 鎮西山山城
3 二本柳古墳群
4 鎮西山南麓古墳群
5 堤三本松遺跡
6 屋形原古墳群
7 谷渡古墳群
8 堤三本柳遺跡
9 青柳古墳群
10 新立古墳群
11 屋形原遺跡
12 堤六本谷遺跡
13 堤土塁跡
14 八藤遺跡
15 二塚山遺跡
16 五本谷遺跡
17 船石遺跡
18 **船石南遺跡**
19 切通遺跡
20 一本谷遺跡
21 坊所一本谷遺跡
22 上のびゅう塚古墳
23 目達原古墳群
24 坊所城跡
25 樫寺遺跡
26 杉寺遺跡
27 坊所二本松遺跡
28 坊所三本松遺跡
29 塔の塚廃寺跡
30 西前牟田遺跡
31 米多城跡
32 前牟田城跡
33 加茂環濠集落跡
34 江迎城跡
35 一ノ橋環濠集落跡
中原町
36 山田蔵骨器出土地
37 山田古墳群
38 大塚古墳
39 八幡社遺跡
40 簑原遺跡
41 姫方遺跡
42 姫方前方後円墳
43 姫方原遺跡
44 ドンドン落遺跡
45 町南遺跡
46 天神遺跡
47 西寒水遺跡
北茂安町
48 宝満谷遺跡
49 宝満宮前方後円墳
50 大塚古墳
51 東尾銅剣出土遺跡
三根町
52 本分貝塚
三田川町
53 吉野ヶ里丘陵遺跡群
54 下中杖遺跡
55 下藤貝塚
神埼町
56 志波屋六本松遺跡
57 伊勢塚前方後円墳
58 馬郡遺跡
東脊振村
59 西石動古墳群
60 戦場ヶ谷遺跡
61 三津永田遺跡
62 西石動遺跡
63 松原遺跡
64 辛上廃寺跡
65 横田遺跡

Fig. 1　三上遺跡9区の位置及び周辺遺跡（1/50,000）

としては、町北部の鎮西山の周辺山麓部から高位段丘上にかけて、小円墳を主体とする谷渡、青柳、新立、奥の院、鎮西山南麓、屋形原などの古墳群が点在している。

一方、この時期の集落は、吉野ヶ里町（旧三田川町）下中杖遺跡[30]、吉野ヶ里町（旧東脊振村）下石動遺跡[31]などが知られているが、弥生時代集落に比べ、遺跡そのものの数も少なく、調査例も少なくいまだに実態が明らかになっていないのが現状である。町内の遺跡をみても、当時の政治的中心であったと考えられる町南部の米多地区周辺における本格的な発掘調査の例がなく、今後の大きな課題といえる。

奈良・平安時代遺跡としては、吉野ヶ里町（旧三田川町）下中杖遺跡、吉野ヶ里町（旧東脊振村）辛上廃寺跡[32]、霊仙寺跡[33]などが著名であるが、この時期の遺跡についてもまとまった調査例が少なく、実態はあまり解明されていない。当時の遺構として大規模なものは、佐賀平野に敷かれた条里制の遺構が上げられ、早くから地名などから条里の復元が試みられ、現在ではほとんどの条里が復元されている。また、大宰府から肥前国府へ通じる官道の調査も進み、近年部分的な発掘調査が行われている。

町内では堤土塁跡[34]や塔の塚廃寺跡[35]などが奈良時代の遺跡として戦前から注目されている。町北部の堤地区の八藤丘陵と二塚山丘陵の間の谷底平野を遮断する形で築かれた堤土塁跡は、版築工法により築かれた福岡県の水城に似た施設＝「小水城」で、その築造目的が、大宰府の防衛施設であるとする説、灌漑用水確保のための溜池の堤防であるとする説など議論がなされてきたが、平成2年度からの土塁の東方に接する八藤丘陵の調査において、土塁東端から一直線に八藤丘陵を東方へ横断する道路側溝状の遺構が検出され[36]、その性格付けにあらたに古代道の存在が想定されることとなった。また町南西部を占める目達原丘陵の南端部に位置する塔の塚廃寺跡は、百済系単弁軒丸瓦が発見され、戦前までは基壇、礎石の存在が知られていた奈良時代中期の寺院址で、目達原古墳群を営んだ米多国造一族の流れをくむ三根郡の郡司層が建立したものと推定されている。また、町内における奈良・平安時代の集落は、農業基盤整備事業に伴う調査や近年の大規模小売店舗建設に先立つ坊所一本谷遺跡[37]の調査などでまとまった調査がなされたのみで、今後の調査例の増加が期待される。

中世になると、北部の山麓部の小峰に山城が築かれ、沖積平野部には環濠を伴う平城や集落が出現する。町内の中世城館址としては、北部の鎮西山山城、上峰町中央部の平野を臨む丘陵部に坊所城跡、町南部の平野部には米多城跡、前牟田城跡、江迎城跡、一の橋環濠集落、加茂環濠集落などが知られていた[38]。しかし、昭和40年代後半からの圃場整備事業によって、これら平野部の遺構は、原状がほとんど失われてしまった。そのようななかで、町の親水公園として整備された江迎城跡では13世紀後半代の龍泉窯系の青磁碗が建物跡ともに出土し、また、坊所城跡では16世紀後半代の青花がそれぞれ出土している[39]。

以上、上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観したが、まさにこの地域は遺跡の密度、その内容ともに高く、遺跡の宝庫と呼ぶにふさわしい地域といえる。

註

1）藤瀬禎博・石橋新次　『柚比遺跡群範囲確認調査第3年次概要報告書』　鳥栖市文化財調査報告書第30集　鳥栖市教育委員会　1980
2）木下巧・天本洋一　『姫方遺跡』　佐賀県文化財調査報告書第30集　佐賀県教育委員会　1974
3）七田忠昭　『検見谷遺跡』　北茂安町文化財調査報告書第2集　北茂安町教育委員会　1986
4）金関丈夫・坪井清足・金関恕　「佐賀県三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』　日本考古学協会　1961
5）七田忠昭他　『吉野ヶ里』　佐賀県文化財調査報告書第113集　佐賀県教育委員会　1992
6）原田大介　『八藤遺跡Ⅲ』　上峰町文化財調査報告書第16集　上峰町教育委員会　1999
7）七田忠志　「原始」『上峰村史』　上峰村　1979

8) 下山正一・西田民雄　「Ⅱ．佐賀県上峰町周辺の地形と地質」『佐賀平野の阿蘇4火砕流と埋没林』　上峰町文化財調査報告書第11集　上峰町教育委員会　1994
9) 高瀬哲郎・堤安信・久保伸洋　「香田遺跡」『香田遺跡』　九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書2　佐賀県文化財調査報告書第57集　佐賀県教育委員会　1981
10) 七田忠志　「佐賀県戦場ケ谷遺跡」『史前学雑誌』　6－2・4　1934
11) 原田大介　『船石遺跡Ⅴ』　上峰町文化財調査報告書第12集　上峰町教育委員会　1995
12) 原田大介　『八藤遺跡Ⅱ・堤土塁跡Ⅱ』　上峰町文化財調査報告書第14集　上峰町教育委員会　1998
前出（6）
13) 金関丈夫・金関恕・原口正三　「佐賀県切通遺跡」『日本農耕文化の生成』　日本考古学協会　1961
14) 高島忠平・七田忠昭他　「二塚山遺跡」『二塚山』　佐賀県文化財調査報告書第46集　佐賀県教育委員会　1979
15) 七田忠昭　『一本谷遺跡』　上峰村文化財調査報告書　上峰村教育委員会　1983
16) 七田忠昭　『船石遺跡』　上峰村文化財調査報告書　上峰村教育委員会　1983
17) 鶴田浩二・原田大介　『船石遺跡Ⅱ図録編』　上峰村文化財調査報告書第6集　上峰村教育委員会　1988
鶴田浩二・原田大介　『船石遺跡Ⅱ本文編』　上峰村文化財調査報告書第7集　上峰村教育委員会　1989
原田大介　『船石遺跡Ⅲ』　上峰町文化財調査報告書第8集　上峰町教育委員会　1990
原田大介　『船石遺跡Ⅳ』　上峰町文化財調査報告書第9集　上峰町教育委員会　1991
18) 原田大介　『船石南遺跡Ⅰ』　上峰町文化財調査報告書第21集　上峰町教育委員会　2002
原田大介　『船石南遺跡Ⅱ』　上峰町文化財調査報告書第22集　上峰町教育委員会　2002
19) 原田大介　『八藤遺跡Ⅰ』　上峰町文化財調査報告書第13集　上峰町教育委員会　1997
20) 木下巧他　『姫方原遺跡』　佐賀県文化財調査報告書第33集　佐賀県教育委員会1976
21) 木下　巧・七田忠昭　「五本谷遺跡」『二塚山』　佐賀県文化財調査報告書第46集　佐賀県教育委員会　1979
22) 石橋新次　『剣塚前方後円墳』　鳥栖市文化財調査報告書第22集　鳥栖市教育委員会　1984
23) 前出（2）
24) 松尾禎作　「目達原古墳群調査報告」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』　第9輯　佐賀県教育委員会　1950
25) 木下之治　「古代国家の形成」『佐賀県史』佐賀県　1968
26) 木下之治編　『銚子塚』　佐賀市教育委員会1976
27) 松尾禎作　『佐賀県考古大観』　祐徳博物館　1959
28) 前出（24）
29) 前出（16）
30) 七田忠昭・高山久美子・西田和己　『下中杖遺跡』　佐賀県文化財調査報告書第54集　佐賀県教育委員会　1980
31) 高瀬哲郎他　「下石動遺跡」『下石動遺跡』　九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（6）　佐賀県文化財調査報告書第86集　佐賀県教育委員会　1987
32) 松尾禎作　「東脊振村辛上廃寺跡の調査」　『佐賀県史債名勝天然記念物調査報告』第5輯　佐賀県　1936
33) 田平徳栄他　『雲仙寺跡』　東脊振村文化財調査報告書第4集　東脊振村教育委員会　1980
34) 高島忠平・柾一義　『堤土塁跡』　上峰村文化財調査報告書　上峰村教育委員会　1978
35) 松尾禎作　「塔の塚廃寺址」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』　第7輯　佐賀県　1940
36) 前出（12）
原田大介　『八藤遺跡Ⅲ』　上峰町文化財調査報告書第16集　上峰町教育委員会　1999
37) 平成5、6年度、上峰町教育委員会調査、整理中
38) 米倉二郎　「中世」『上峰村史』　上峰村　1979
39) 原田大介　『坊所城跡』　上峰町文化財調査報告書第10集　上峰町教育委員会　1992

Ⅱ．調査の概要

１．調査に至る経緯

平成31年4月17日、上峰町大字坊所字三上における建売分譲住宅建設工事に係る「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が、株式会社Ｃ＆Ｃ代表取締役名で提出された。対象地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である三上遺跡の範囲内であったため、文化財保護法に基づく届出が必要である旨回答するとともに、事前の確認調査の実施に向けて関係者と協議を行った。

これを受けて、平成31年4月17日付で、佐賀県教育委員会教育長あてに文化財保護法に基づく届出が提出されたため、埋蔵文化財確認調査を行うことになった。

確認調査は、開発予定地である大字坊所字三上3183-1、3184-1の2筆、合計1,906㎡を対象に、令和元年5月24日に実施した。確認調査の結果、開発予定地の東側にピット、土坑などが検出された。

今回の建売分譲住宅建設工事では宅地内道路部分について切土が計画されており、今回の埋蔵文化財確認調査で検出された柱穴等の遺構に工事の影響が及ぶものと判断される。確認調査の結果を受けて、上峰町教育委員会は、県文化財課と今後の遺跡の取扱いについて協議を行い、当該開発区域の内、宅地内道路部分 300 ㎡について記録保存を目的とした本調査を実施することになり、残りの 1,606 ㎡については地下の遺構に工事の影響を与えないことを条件として現状のまま保存することとなった。

２．調査の経過と方法

記録による遺跡の保存が必要になった300㎡について、令和元年7月19日、事業主と上峰町との間で埋蔵文化財発掘調査に係る委託契約を締結した。令和元年8月5日に重機を用い、調査員立会いの下で遺構面まで掘り下げた。表土除去完了後、同日から作業員の人力による遺構検出作業、掘削を行った。完掘後必要に応じて、個々の遺構の写真撮影や実測を行った。令和元年9月6日に調査区全体を対象に縮尺1/20で詳細遺構実測作業を行った。令和元年9月11日に掘削機による調査区の埋戻しを行い、事業主に対して対象地の引き渡しを行った。

現地作業終了後、令和元年度に整理作業を実施し、報告書を作成した。

Ⅲ．遺跡の概要

１．遺跡の概要（Fig. 2）

三上遺跡は、吉野ヶ里町目達原付近から本町米多集落付近へ延びる目達原丘陵の中央部、標高約 8m～16m 付近に広がる縄文時代から奈良・平安時代に及ぶ集落遺跡である。

本町と西方の吉野ヶ里町にまたがる目達原丘陵は、戦時中の陸軍飛行場建設に伴い平坦な土地へと改変されているが、それ以前はいくつかの丘陵と谷が入り組んだ複雑な地形を呈しており、一帯の丘陵部には大塚、古稲荷塚、稲荷塚などの前方後円墳が点在し目達原古墳群を形成していた。

三上遺跡が位置する三上地区一帯は、近年開発に伴う発掘調査が部分的に行われるようになり、縄文時代から中世に及ぶ遺構が現在も地下にかなりの密度で遺存していることが明らかになった。

２．調査の概要

今回の調査の対象となった三上遺跡９区は、目達原丘陵の北部、標高16m付近に位置している。調査区は住宅に囲まれている。調査区域の土層は、後世の耕作などによる削平を受け、層厚約20cmの表土直下が更新世低位段丘で、いわゆる地山であり、遺構検出面となっている。

調査区は、後世の削平により遺物包含層が失われ、遺物の出土数は少量である。検出された遺構は、近傍のこれまでの調査の結果から、奈良時代の集落跡の一部と推測される。

開発予定地は中央に道路が敷設され、周囲に6戸の建売分譲住宅が建設される予定である。調査対象地区は道路敷設予定の7m×43mを設定した。

Ⅳ．遺構

遺構については土壙と複数のピットが、調査区の南半を中心に検出された。遺物の出土は少なく、SK902 でのみ出土している。ここでは検出された土壙 5 基について図示し、報告する。

SK901

調査区北西隅で検出し、一部は調査区外のため掘削できなかった。平面形は東西に長い楕円形で、底面は段状を呈す。遺物は出土しなかった。

SK902

調査区中央部で検出した大形の土壙である。平面形はやや南北に長い楕円形で、最大径 2.8m、深さ 0.63mを測る。底面は部分的に凹凸がみられ、南側に向かいやや深くなる。遺物は、土師器、須恵器、土製品が出土した。

SK903

調査区中央部、SK902 の南側に隣接して検出した。平面形はやや東西に長い楕円形で、底面はほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。

SK904

調査区中央部の東側隅、SK903 の南約 5mの地点で検出した。平面形は南北に長い隅丸の長方形を呈し、底面の 2 ヶ所で小穴を検出した。遺物は出土しなかった。

SK905

調査区南端から北に約3mの地点で検出した。平面形は東西に長い楕円形で、底面は西側壁面をやや掘り込み、凹凸がある。遺物は出土しなかった。

V．遺物

遺物はSK902でのみ出土した。土師器、須恵器、土製品が出土し、実測可能な14点について以下に報告する。

土師器

1～4は甕である。1は小形で、体部は丸みを帯び、頸部はややすぼまる。口縁部は緩やかに外反し、端部は丸く収める。体部下位に横方向のヘラ削りを施す。2・3は、頸部のすぼまりは弱く、口縁部がわずかに外反する。4は、頸部がくの字状にすぼまり、口縁部が外反して開く。3・4は内面にヘラ状の工具跡が残る。

5・6は皿である。5は6に比べ深い皿で平底に外傾する口縁部が付き、6は平底にほぼ直立する短い口縁部が付く。口径復元値は5で14.8㎝、6で22cm。

12は甑で、把手部分を含む体部の破片である。残存高10.3cmで、外面に煤が付着する。

須恵器

7～10は杯蓋である。いずれも口縁部に短いかえりがつく。7・9・10は口縁部のみの破片で天井部の様子は不明であるが、9は天井部へ続く立ち上がりが緩やかで比較的低い天井部をもつものと推定される。8は体部の立ち上がりからやや屈曲し、平坦な天井部をもつ。

11は杯の口縁部から体部にかけての小片である。体部はわずかに外傾して立ち上がり、口縁部はやや外反して開く。

土製品

13・14は土錘である。14は土師質で、13はやや硬質で暗灰色を呈す。残存長は13で7.3㎝、14で5.8㎝である。

Fig. 2　三上遺跡9区　周辺地形図及び調査区位置図（1/5,000）

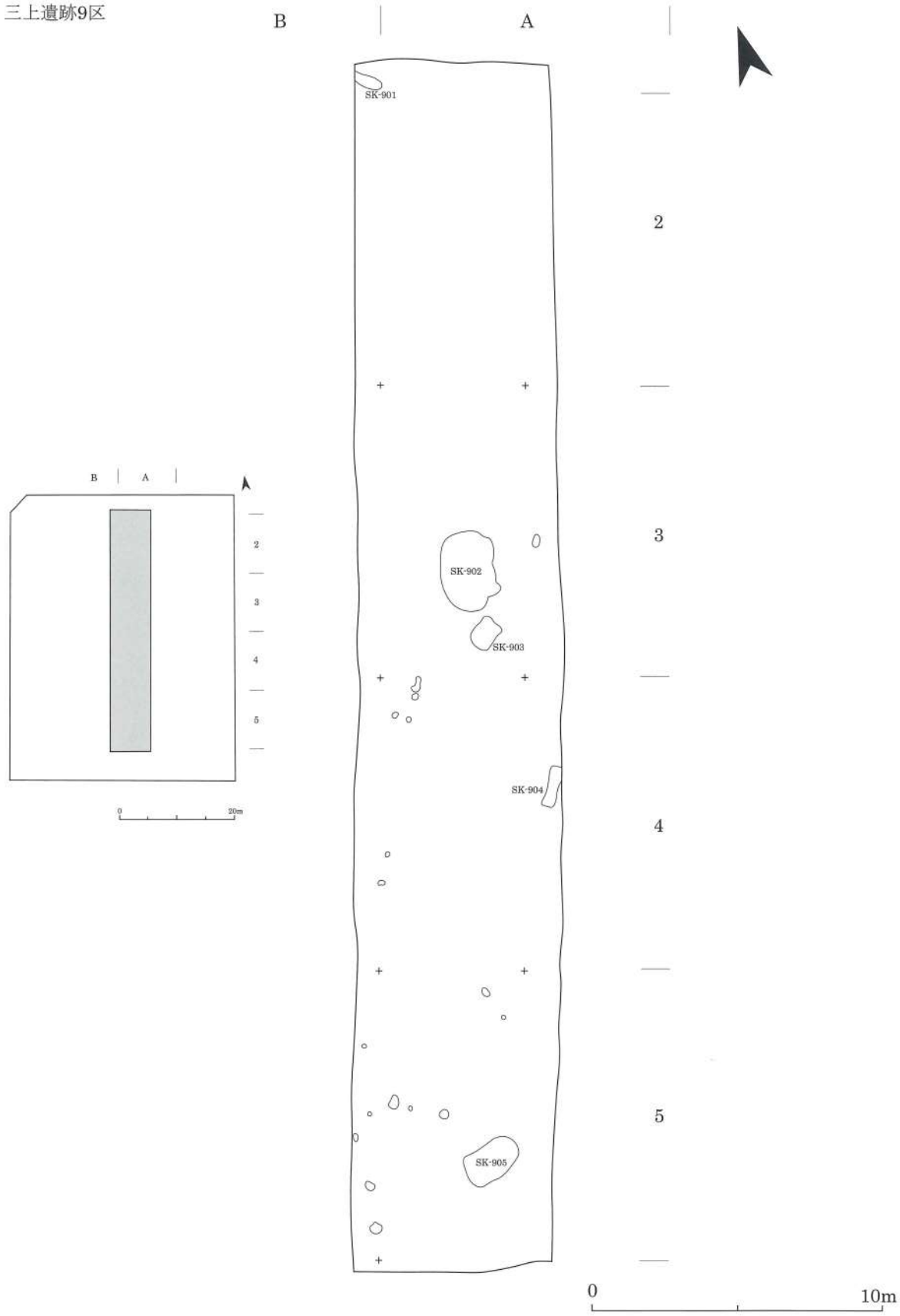


Fig. 3　三上遺跡9区　調査区配置及び遺構配置図（1/200）

Tab. 1　三上遺跡 9 区　出土土壙一覧表

遺構番号	平面形態	規模（上段…上面・下段…底面）単位：m・㎡				出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積		
SK-901	楕円形	※1.00 0.92	0.42 0.20	0.31	0.2		
SK-902	楕円形	2.80 2.38	1.92 1.48	0.63	3.0	土師器片 須恵器片・土錘	
SK-903	楕円形	1.17 0.96	0.80 0.62	0.21	0.5		
SK-904	隅丸長方形	1.52 1.32	0.46 0.40	0.13	0.4		
SK-905	楕円形	2.10 1.68	1.16 0.93	0.21	1.3		

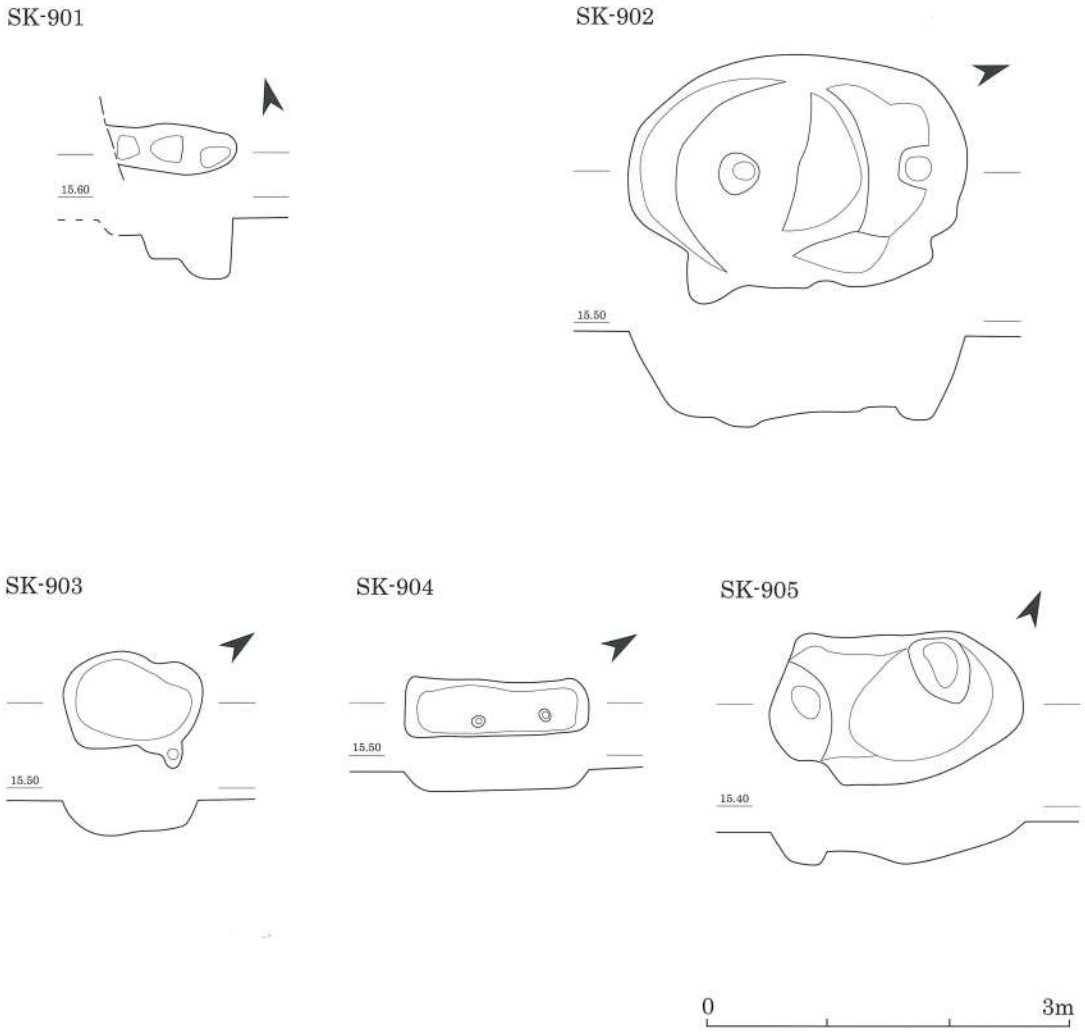


Fig. 4　三上遺跡9区　遺構実測図

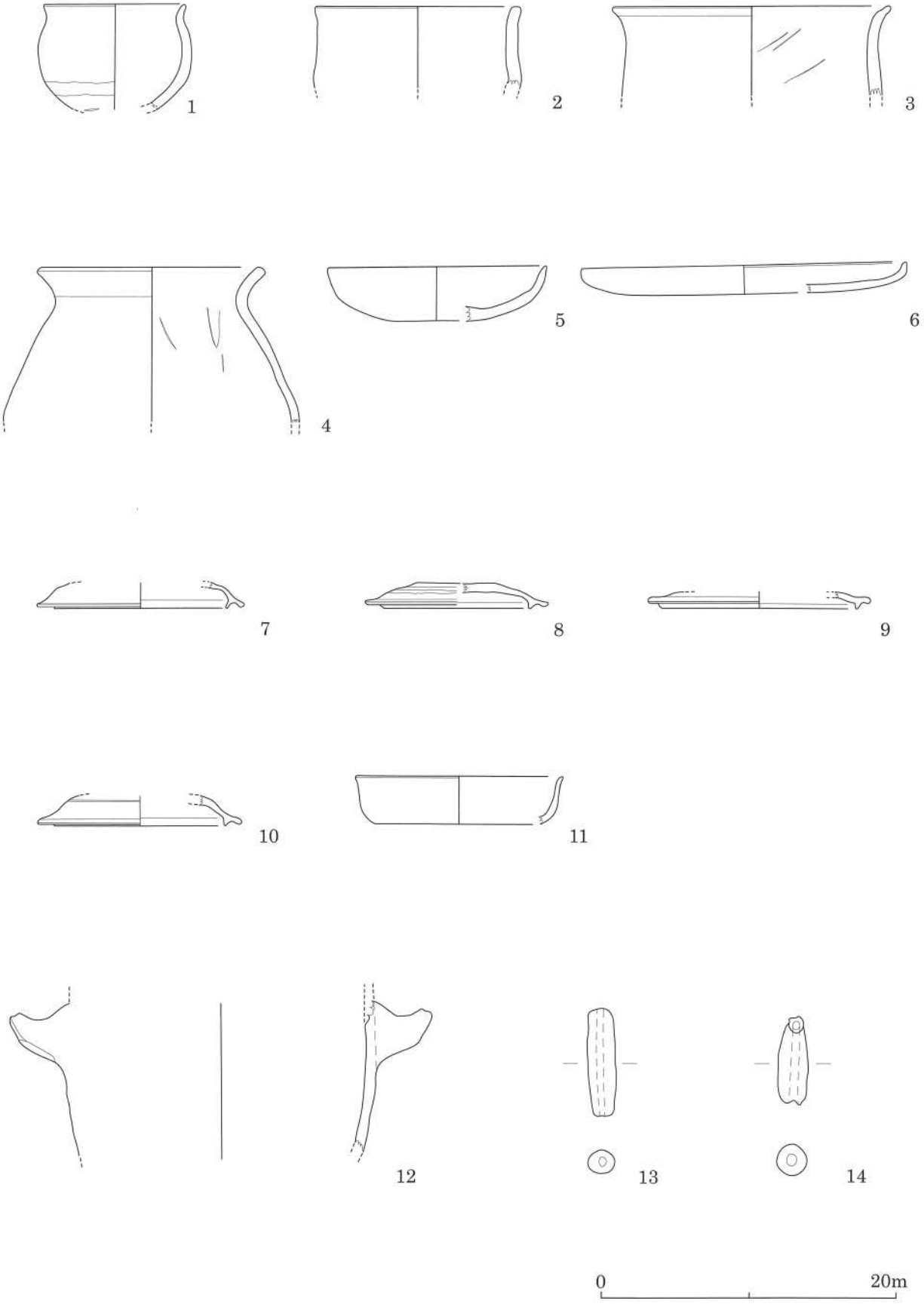


Fig. 5　三上遺跡9区　遺物実測図

Ⅵ. まとめ

今回の三上遺跡 9 区の発掘調査では、調査区の南側を中心として土壙やピットが検出され、大型の土壙 SK-902 からは、数量は多くはないものの、土師器片、須恵器片、土製品が出土している。出土した遺物は、奈良・平安時代の所産とみられ、調査地は当時の集落跡の一部であると推測される。今回の調査区の東側に隣接する三上遺跡 8 区の調査では、奈良時代の土壙やピットが検出されており、東南東 200m付近に位置する 7 区では、同時代の掘立柱建物跡や溝跡等が確認されている。このような周辺の調査結果から、当該地周辺には奈良・平安時代の集落が一定の範囲をもって展開していたと考えられ、今回の調査地点は、当時の集落の縁辺部に当たると推察される。

当該地は、隣接する 8 区と同様、遺構面までの表土層が薄く、本来の地形に後世の削平を受けていることが推測された。戦時中の陸軍飛行場建設や戦後の開拓団入植時の開墾等により、地形に影響が及んでいるものと考えられる。今回の調査は調査面積が 300 ㎡と狭小であり、検出した遺構の遺存状況にも後世の削平が影響している可能性が高く、当該地を含めた遺跡全体の評価は、今後の調査例の増加を待って改めて検討したい。

三上遺跡 9 区　調査前　—北東から—

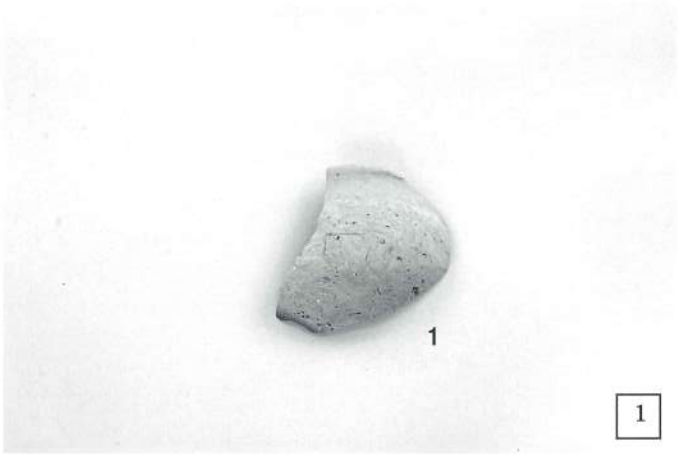
三上遺跡 9 区　調査区遠景　—北から—

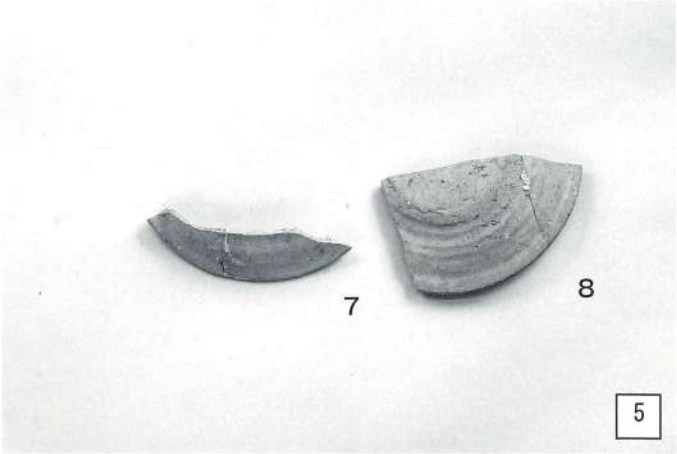
三上遺跡 9 区　遺構検出状況　—上空東から—

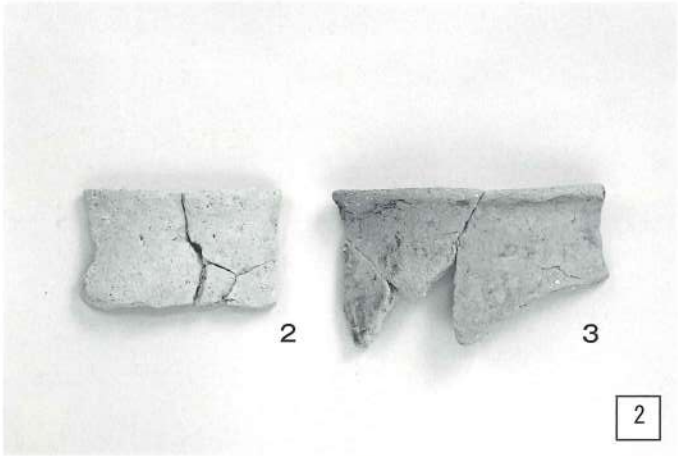
三上遺跡 9 区　調査終了後　—南西から—

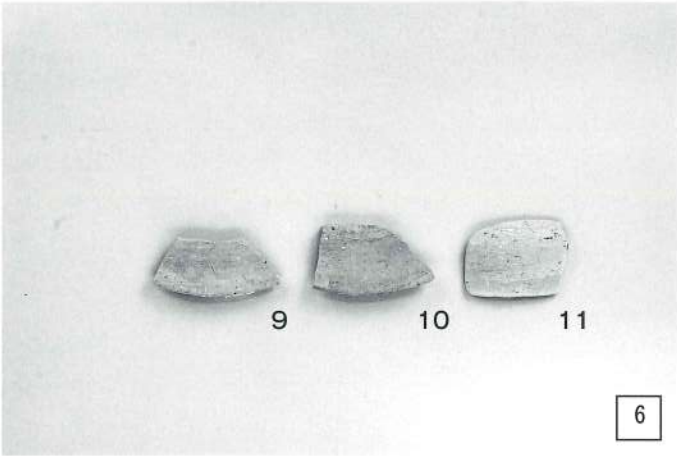
1　SK-901　―北から―
2　SK-902　―西から―
3　SK-903　―西から―

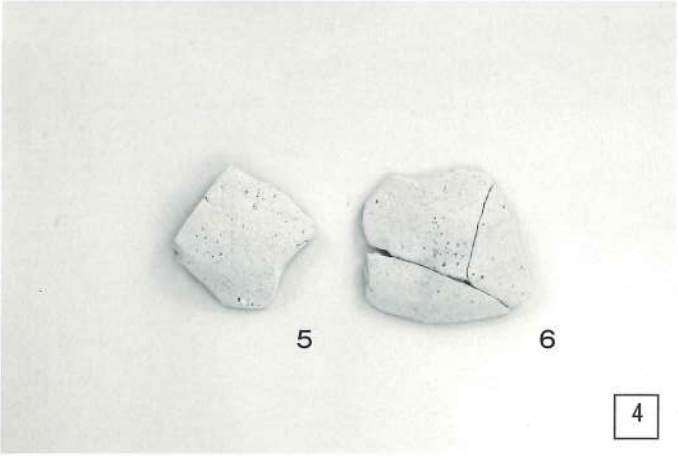
4　SK-904　―西から―
5　SK-905　―北西から―
6　作業状況

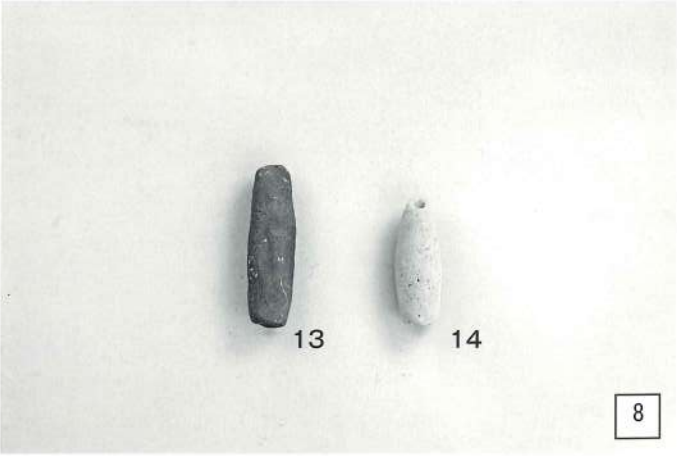












1　SK-902 出土遺物（1）
2　SK-902 出土遺物（2.3）
3　SK-902 出土遺物（4）
4　SK-902 出土遺物（5.6）
5　SK-902 出土遺物（7.8）
6　SK-902 出土遺物（9.10.11）
7　SK-902 出土遺物（12）
8　SK-902 出土遺物（13.14）

報 告 書 抄 録

ふりがな	みかみいせき9く
書名	三上遺跡9区
副書名	建売分譲住宅建設工事に伴う埋蔵文化財確認調査報告書
巻次	
シリーズ名	上峰町文化財調査報告書
シリーズ番号	第49集
編著者名	原田　大介　伊達　有彩　松本　周作
編集機関	上峰町教育委員会
所在地	佐賀県三養基郡上峰町坊所319-4　上峰町民センター内　Tel 0952-52-3833/Fax 0952-52-3888
発行年月日	2020年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積㎡	調査原因
みかみいせき 三上遺跡	さがけんみやきぐん 佐賀県三養基郡 かみみねまちおおあざぼうじょ 上峰町大字坊所 あざみかみ 字三上	41345	41	33° 19'26"	130° 25'03"	2019.8.1 ～ 2019.9.13	300	建売分譲住宅建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
みかみいせき 三上遺跡	集落跡	奈良・平安時代	ピット・土壙	土師器・須恵器・土錘	

上峰町文化財調査報告書第49集

三上遺跡9区

令和2年 3月31日 発 行

編集
発行　上峰町教育委員会
佐賀県三養基郡上峰町坊所319-4

印刷　大同印刷株式会社
佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20

発掘現場から文化力
POWER OF CULTURE